

利潤追求に拍車をかけるように出来ている。例えば都市計画の一つに下水道の問題がある。排水をいかに浄化すへきかという大きな問題は、たゞ流しさせることのみを急いでいる。そして今また公害をますます進行させるものに流域下水道建設が行われていることである。

(土浦も設置区域に入っている)これが出来ると川と湖はますます汚れていく。工場から出る有毒な物質を含んだ廃水は誰の目を気にすることもなく、又どこから流したかも判らないまま、平然と水道の排水管を通じて川に流れ出る。これはますます資本家の横暴を黙視することになるのである。愛知県境川流域下水道問題を調査している近藤準子氏の報告によると、この流入水の六割が工場廃水でその七割が豊田自動車系統のものであり、油分と重金属が多分に含まれているというのである。これから考えると、霞が浦周辺には、石油、化学、金属系の会社がたたくさん群がっている。そして西には筑波学園都市が控えている。流域下水道が設置されれば、そこから流れ出るおびただしい化学薬品(有機物質、無機物質)、重金属、高分子物質、油等がますます湖を汚していくであらう。

昔、桜川でお花見の行事のあった頃、つくしを摘みながら桜川のおいおいをかいた。いつせいに咲きだした新芽

に、圧倒されそうな熱気で息苦しくなり、川辺までおりて、何となくなまぐさい桜川のおいおいにほっとしたものである。川のおいおいというものは、いつも魚を連想させそこに生える植物のおいおいを連想させるものであった。これが今でも、私の川に対する子供の頃のおいおいの記憶である。ところが都内にくつかの川はあっても、私の記憶する川などとうにない。皆どぶ川と化してしまっただのである。それは都内ばかりではない。桜川にも私の記憶している川のおいおいはない。

五月の連休に霞が浦に行ってみた。川口町から踏切りを渡って霞が浦に出ると突然湖面から、すごい臭気が漂ってきた。それはかなり激しいもので一瞬咳込む程であった。すでに土浦で隅田川の臭いを嗅いでしまっているのである。何ということであらう。霞が浦は土浦市民の飲み水である。もう子供の頃の霞が浦を思い出して想い出そう等という甘い郷愁を述べている場合ではない。生死にかかわる問題なのである。それにしても川辺に住む人達は、こうなる前にも断続的に悪臭に悩まされたはずである。もっとも嗅覚は人によっても違い注意していないと微量のおいおいには慣らされて、何も感じなくなってしまう。においというものは、動物が有害無害を本能的に嗅ぎ分ける原始的なデテクターである。嫌な臭いは有害な